

灰の中のかきもち（福岡）

昔ーし、福岡ン聖福庵チュー所え、年寄りの庵主さんと小僧さんが居らした。庵主さんナ、旨かもんナいっでんわーがばっかって喰いよらしたっチュウモンある日の事ジャッカイ、庵主さんが小僧バ呼んで「ランブン油ン切れたケン、寺領ン油屋に行たて買って来て呉れい」ちゅて、使いに出さしたっチュウタイ。

小僧が出掛っとバ見届けた庵主さんナ、戸棚ン奥になわしとった欠き餅バこそーっと取り出ちゃーて、囲炉裏ン薪の灰の上に並べて、焼き始めらした。

小僧は一升瓶バぶら下げて、どんどん坂道バ駆けおりて、二反首ン橋ンところまで来た時、ひょくっと立ち止って「今のうは、庵主さんナわーが一人で、んまか物バ喰いよらすちゃかろうかね」そぎゃん思うたりや、小僧は矢も盾もたまらんごてなって、今来た坂道バー散掛けで引き返した。

庵の中はシーンと静まり返って、物音一つせんバツテ、何じゃい香ばしか匂いのブンブンしてくる。

小僧は、生唾ン出てくっとバぐっとこらえて、障子ン穴から中ン様子バじーっと覗いて見たりや、庵主さんナ何じゃいんまかりそうに喰いよらす。

いっとき様子バ見とったバツテ、腹が「クー」チ鳴りだすもんじゃって、なん様欲ゆーしてたまらんごてキャーひなった。

小僧は、障子バ「ガラー」チュテ開けて、息ア引切るゝごてして、「庵主さん、油代バきゃー忘れたケン戻って来たばナ」チ言うたもんじゃって、庵主さんナうっ魂がって、焼きよらした欠き餅バ、うろたえて薪の灰ン中きゃー、押し込みよらす。

「くそ慌て者が、引き返して来る奴があるか、銭な明日でん良かったてえ、まこてーま」

慌てとらすとは、庵主さんの方じゃっかい。

小僧は、囲炉裏の火箸バ取り上げて囲炉裏ン薪の灰ン上エ道順バ書きながら「石段バ、トントントンちゅて駆け降りて、こっちさん曲がってから…」

ところが、薪の灰ン中きゃー、んまかりそうに焼けた欠き餅ン二つ三つ出て来たもんじゃって「うわああ、こけにゃかきもちのあっとぞ、こりゃんまかばい」ちゅて小僧は、庵主さまにゃ見せびらきゃーとって、喰い始めた。

「そりから坂道ば走り下って二反首ン橋ン…」

ち言いながら、火箸ば搔き回すたんびに薪の灰ン中から欠き餅の次々出て来る。小僧は、出てくる片っ端から、いち喰うてしもうたっワイ。

庵主さんな小僧が、んまかりそうに喰うとば
くいまいましい奴っじゃ
ち思いながら、どがんもしよんなかもんじゃっ
で、じっと見とらすばかりじゃったちゆたい。
そぎゃんことんあってから、庵主さんなわあ
がばかりで喰わあでにゃ、小僧にも同じごて
分け与えて喰あせらすごてならしたちゅうた
い。

こっでしみゃあ

